

第20回 | 誉れ高き徳川三代将軍 徳川家光

「生まれながらの将軍」と云われた家光は
家康の生まれ変わりとも云われた名君だった!!

まえがき

歴史を振り返ると、武家、公家の世は「お家存続」が人の命よりも大切という時代であった。筆者は三代目にこだわりをもっている。それは何故かというこの時期こそ「お家」の存続にとっての重要なターニングポイントであると考えているからである。一般に、徳川家光においては祖父家康、父秀忠は自ら戦いの苦難を経験して、権謀術数けんぼうじゆつすうを駆使して天下を獲得した。しかし、徳川家光は歴戦から生き残った戦国大名としてみれば、実力で勝ち取ったのではなく襲名ということだけで将軍という地位が転がり込んできたラッキーな男と考えている大名もいたに違いない。しかし、このような諺方みかたには同意し兼ねる。筆者が三代目にこだわる由縁を徳川家光という将軍にフォーカスして述べていきたい。

三代目で繁栄の基礎をつくった人物を取り上げれば、例えば室町幕府の三代将軍「足利義満」がいる。また、外様大名でありながら、常にお家お取りつぶしの危機をうまく乗り切り、加賀百万石「前田家」を幕末まで存続させる基礎をつくった三代藩主「前田利常」もいる。逆に、三代目で滅亡した「源氏」などは対照の例である。これらは一例だが、基本的に三代目の時期は創業者時代から少なくとも50年から60年が経過し

ている頃である。家臣という人財、経済情勢、お家を取り巻く政治情勢が、大きく変遷してきている。この流れを敏感に感じ取り藩の制度改革を講じた藩主こそ、後世において「名君」と云われていることが多い。今回は徳川幕府三代将軍徳川家光を取り上げ、家光の政治・軍事等の制度改革に着目し、徳川幕藩体制260年の基礎を作った手法を振り返ってみたい。

1 家光政権の始動

1632年、徳川二代将軍秀忠公が江戸城西の丸で病没した。54歳であった。遺体は遺言により増上寺に葬られた。秀忠公の死の翌日、新将軍の命で江戸在府の大名すべてに江戸城への登城が命じられた。その場での新将軍の言葉が今に残る。関ヶ原合戦以来の歴戦の生き残り戦国大名の前にて、彼が自らの信念と胆力を示すために話したことを、二つの古文書より紹介したい。

「祖父家康公、父秀忠公は、櫛風しふう沐雨もくうの労を重ね、四海の統一の業を成し遂げ天下の諸大名恐れ従い奉らぬはなし。我が身は若年であり未だ戦いに臨んでいない。兵鋒へいほうの利鈍りどんも試したことがない。かかる隙に乘じ、天下を狙う望みを抱く者ならば、すみやかに本国に馳せ下り戦いの用意をするがよい。そしてすみ

やかに御勢を余に向けられ、戦さにより決着をつけることをよしとする。」
(武野燭談ぶのしよくだん(注1))

将軍家光が自ら「若年」と云い、「実戦経験のないこと」を公言して諸大名に天下取りを挑発したのである。関ヶ原合戦以来の生き残り大名が居並ぶ中、威風堂々と云いのけた胆力の力強さがこの一次史料から読み取れる。

このとき、最前列にいた伊達政宗が進み出て

「御代のはじめにあたり、勇ましくお言葉を感涙の思いで聞き及びました。普天のもと、徳川家に御恩を想わざる者はござりませぬ。もし、徳川家への大恩を忘れ義かえりをも顧みず逆心を企む者あらば、まずこの伊達政宗が上様の盾となりお相手申します。この老体、最後の思い出に一戦して老武者の働き、上様にご覧いただきとうござります。各諸大名の方々、まずはこの伊達政宗がお相手申す。」と控える諸大名に高々と云い放った。

「家康公天下草創、各々の方々の戦力の助力を以て戦さに及び、父秀忠公も同じく、昔は各々の朋輩ほうはいのつもりで接していた。しかるに待遇もあたかも今までは客人のように扱ってきた。今後は某それがしの代に及んで申せば、某は生まれながらの天下人にして、今まで家康公や秀忠公の皆に対する接し方を我が代で変えることとする。今後は外様大名・譜代大名

すべての大名は、この家光の朋輩としてではなく家臣扱いとする。」と断言した。(柳営秘鑑^{りゅうえいひかん}(注2))

関ヶ原合戦、大坂冬の陣・夏の陣に参戦し、歴戦の生き残りの戦国大名の面前にてこのように堂々と断言したのである。これは、江戸幕府の公式古文書「徳川実記」にも記載されている。大変な度胸の持ち主である。代替わり時期には野心武将が存在し「この時ぞ」とばかりに反逆する者もいたのである。実際、家光親政政権の開始時期は、徳川家の絶対権力が、まだ定着していない政治情勢の中から始まった。率直に言って「協力はしてきたが家臣でない」と、内心思っている大名が少なからず存在していたことは間違いなく、政治を円滑に実行するには、まず、家光政権のもとで幕府の軍事組織、政治組織を確立することが急務の課題となっていた。

2 御代始めの御法度

家光は外様大名の大大名、伊達政宗・前田利常・島津家久・上杉定勝・佐竹義宣の5人を江戸城に呼び、肥後熊本52万石の外様大名加藤忠広(加藤清正の三男)の改易(お家取りつぶし・領地没収のこと)を言い渡した。いわゆる大大名への牽制球であった。これが御代始めの御法度と云われている。(おそらく家光が最初に各大名に大きな決意を示した命令であったのでこのように云われたと筆者は推測する)公式には、

一週間後に江戸城に登城した諸大名に知らされた。武断政治の始まりである。取り潰された大名は外様だけでなく、親藩・譜代大名にも及んだ。御代始めの御法度以前の家康から家光までの改易大名は以下の通りである。

主な大名

親藩大名

- 徳川忠長(家光の実弟) 50万石
- 松平忠輝(家光の伯父。家康の六男。秀忠は三男) 75万石
- 松平忠直(家光の甥) 75万石

譜代大名

- 本多正純(家康の参謀) 他 48家

外様大名

- 福島正則
- 加藤忠広(清正の子) 他82家(関ヶ原合戦で西軍に組した大名含む)

一人の命よりお家の存続が大切な時代にこのようなお家断絶は、各大名にとって否応にも幕府に絶対服従の思想を植えつけさせた。

3 将軍の親政体制の強化

(1) 各大名の惣目付(後の大目付)の創設

柳生宗矩・井上政重ら4名に命じた。

(2) 諸国巡検使を創設

全国を6地域に分けて、地域ごとに3名を任命。各大名の国の国境、絵地図、統治の仕方まで悉く調べさせた。これには、各大名に踏み絵のごとく従属せざるをえない恐怖心を抱かせた。

(3) 幕府内の機構改革

今まで、年寄という名で呼ばれていた重臣を老中という役職に一本化し、大名・朝廷・公家支配に当らせた。そして、老中を幕府の最高職とし大目付・町奉行・勘定奉行・遠国奉行等々を老中の指揮統括下に置き、幕府運営の中核として位置づけた。

(4) 六人衆の創設

家光の側近として、老中とは役割の違う相談役六人衆を設けた。この中から将来老中として、活躍する人物が輩出された。

(5) 職務規定の制定

家光は老中と六人衆の職務規定をはっきり明文化した。

老中の管掌事項

- ① 禁中・公家・門跡の監視
- ② 国持衆および1万石以上の大名の御用と出納の監視
- ③ 大名へ将軍の命令の意思伝達をする役割
- ④ 幕領代官支配
- ⑤ 幕府財政の統括
- ⑥ 大規模な普請・作事・堂塔の建立に対する吟味
- ⑦ 知行割(領国の石高の決定やお家取りつぶしの将軍への具申)
- ⑧ 寺社方の監視
- ⑨ 異国との外交政策の審議
- ⑩ 国絵図に基づき幕府への届け、国境による訴訟の吟味と審判

(6) 六人衆の管掌事項

- ① 旗本の御用と訴訟
- ② 諸職人の目見と暇
- ③ 医師方の御用

- ④旗本以下の通常の普請・作事の監視
- ⑤下賜物管理
- ⑥京・大坂・駿府などの奉公する番衆・諸役人の御用の受け付けと監視
- ⑦1万石以下、組はずれ者の御用と訴訟の受け付けと審判

六人衆は老中宛法度と同様、これらすべて将軍への言上することが義務付けられた。このように客観的に職務規定と職権を与え、役割分担を明確にした。老中と六人衆との関係については並列的で上下関係は設定されておらず、それぞれが将軍家光に直轄する体制になっていた。このようにして、家光は将軍親政体制の強化を図ったのである。

4 江戸幕府の軍事力

(1) 将軍の直轄軍の強化

江戸幕府の基幹軍事力は、俗に旗本8万騎と云われているように、家光の代になってそれまでよりさらに増強されている。江戸幕府の全国統治のための両輪とは、軍事力と行政機構の構築である。

江戸幕府の初期の基幹軍事組織は、1615年に制定された武家諸法度が基であったが、諸大名との力関係を勘案してか、手ぬるい組織形態になっていた。組織として将軍家の強力な幕府基幹軍事力になったのは、家光政権になってからである。

(2) 江戸幕府の基幹軍事組織

①大番

江戸幕府という組織としての直轄軍である。

②書院番

将軍自身が直轄する親衛隊である。

③小姓組番

書院番と同じく将軍直轄軍として、どんな時でも付き従い身辺警護を任務とした。

これらが「三番」と云われ、将軍直轄軍の中核をなした。その後、新番・小十人組が新設され、これらを含めて「五番方」と呼ばれた。また、基幹親衛隊以外に、先手鉄砲組・先手弓組・槍組・徒歩組・百人組といった歩兵部隊などが存在した。この初期の組の頭の任命は、将軍個人が直轄していたため、将軍との親密な人間関係にある家臣が登用に際しお気に入りとして色濃く反映されていた。その後少しずつ老中が幕政の中核になるにつれ、この風潮は無くなり、公平に優秀な家臣が登用されていった。大番組頭は、当初1万石以上の譜代大名が任命されていたが、後々は5000石以上の旗本からも任命されるようになった。総数12組で組織され、すぐさま1万人の兵力を集められる幕府最大の基幹軍事集団として存在した。

家光はほかに、書院番十組・小姓組十組を編成し4000石以上の旗本を頭に任命した。これらの直轄軍を増強させることにより、一夜にして約2万人の兵力が江戸城に結集できる体制を創り出したのである。これは、100万石を領する最大の外様大



三代将軍家光の霊廟(墓所)である日光山輪王寺「大猷院」

名、前田家でも動員できないほどの強大な軍事力である。

また、家光は1633年には1615年以来施行されてきた元和の軍役令を大改訂した。軍役とは主君から与えられた知行に対して、その代償として軍事上家臣が負担する義務のことである。「御恩」に対する「奉公」にあたる。軍役の中心は戦時における出陣が主であるが、他にも將軍上洛や日光東照宮への参拝の供奉等々、幕府の命令による動員はすべて軍役に加えられた。

寛永(1633年)の軍役令は、元和の武家諸法度より厳しく、細かな事項まで改定された。例えば、一例ではあるが200石の旗本の場合、8人の陪臣(直臣の家臣)動員が義務づけられた。この軍役の制度変更は、外様大名にも譜代大名にも例外なく命じられた。家臣にとってかなりの負担増である。

翌年、家光は三度目の上洛をした。この時の軍役令は、前年改定した軍役令の半役(半分)でよいとお触れを出したが、それでも、40万人にのぼる軍勢が付き従ったのである。これらの幕府軍の巨大な動員力は、諸大名に恐れを抱かせるには余りあるものであり、幕府の基盤の強さを全国に知らしめた。

5 江戸幕府の行政機構

行政面においては、当初は老中・寺社奉行・勘定奉行・留守居役・作事奉行・町奉行等々家光の直轄下においていたが、これらの行政機構

を変更し、老中を行政の最高決議機関とし、老中の配下に各奉行が入るよう位置づけた。

この老中を中核に据えた幕政機構は、家光政権のもとで確立され、家光政権下で断行された行政の機構改革が、後々幕末までの幕府政治の根幹をなした意義は大きいものである。

むすび

徳川家光は江戸幕府三代目である。家光が政権を引き継いだ時代と家康が幕府を開府した時代とでは、世の中のすべての状況が変化している。昔を辿れば例えば室町幕府三代將軍足利義満は、朝廷・守護大名をうまく味方につけ、盤石な幕府機構を確立した。また、加賀百万石を支えた初代前田利家から見た三代目藩主前田利常はしっかり世の変化を読み切り、藩の行政面・幕府との付き合い方・藩の軍事すべてを改革していった例は幾つかある。言い換えれば三代目の時期は、世の中の変革期に当たることにおいて共通している。

現代のように複雑に入り組んだ世界情勢の中において、世界からみた日本の立ち位置はどうあるべきかを、歴史から学ぶことこそ「温故知新」と云う所以である。家光はその後「鎖国」を断行し、「島原の乱」を見事に鎮圧し、キリシタンの宗教弾圧により日本国民のキリスト教と仏教の思想的分断を防いだ。

また、「寛永の大飢饉」においても

治水の重要性を説き、各大名に堤防・洪水対策を指示し、米を主流とする日本経済の安定化をもたらした。徳川幕藩体制が260年続いたのも、その時折々に世の中を読み切り、国家を柔軟に変革していった家光の基本理念が、後々の為政者に影響を与えていったからであろう。徳川三代將軍家光という男、「生まれながらの將軍」として、はじめから將軍としての権力を掴んだように云われているが、そうではなくて家光は自分が生きている今の世を分析し、最適な手段を講じていったからこそ、盤石な幕藩体制が維持できたものと思う。だから家光は、家康の生まれ変わりと呼ばれる由縁がここにあるのである。家康同様、人を見抜く眼力、行動力、指導力、先見力を兼ね備えている名君であったのだ。家光が徳川幕府の三代目であったからこそ、創世記の徳川幕府の枠組みが確立し、かつ260年もの長きに亘り日本に平和をもたらした礎となったのである。

(注1) 武野燭談

江戸時代前期、初代徳川家康から五代綱吉に至る歴代將軍、御三家・老中・旗本・諸大名とその家臣の業績や言行を書き留めた三十巻からなる古文書。

(注2) 柳営秘鑑

江戸幕府の年中儀礼・格式・旧例・故事・諸士勤務の法規等を記した書物。全部で五十四巻からなる古文書。

(参考文献)

吉川弘文館 「徳川家光」藤井譲治著
ミネルバ書房 「徳川家光」

(2019.10.24)

OKB総研 特命研究員 三矢 昭夫